

ミュージシャン

中田 亮 さん

今年で結成 25 周年となる日本のファンクシーンを代表するバンド、オーサカ=モノレールのリーダーである中田さんから、ファンクミュージックとは何か、ファンクに興味を持ったきっかけなどをお話いただきました。話題は、ファンクにとどまらず、アメリカの公民権運動やジャズのマニアックな話(本記事では割愛)にたどり着きました。

(聞き手・構成: 高橋 辰三, 西川 達也)



— 本日はよろしくお願ひします。

(LIBRA2016年9月号を見ながら) お送りいただいたこれを拝見しました。少年審判についての再非行防止に向けた運営などの記事を興味深く読みました。辺野古のことも何回か出てきていますね。

— この号はたまたまミュージシャンのインタビューが掲載された号なのでお送りしたのですが、辺野古の問題にはご関心があるのですか。

関心はもちろんあるんですけど、直接行ったりとかまではしてないですね。ただ、ミュージシャン仲間のそんなに遠くない人が高江に行ったりしてます。今日は国会前でデモがあるから、南スーダンのことだと思わんですが、この後それに行こうかなと思ってます。

辺野古のことは、実際に訴訟になっていますよね。こういう「高度な政治案件」というようなやつとか、人権の部分というのは、正直僕は、弁護士さんの世界でそういうことを言っている人はそんなにいないのかなと思ってたんです。でも、こういう会報誌にちゃんと載って、活動をされてるんだなと思って。

— 中田さんがリーダーをされているオーサカ=モノレールも、代々木公園でイベントをされていましたね。どのようなイベントだったのですか。

あれは「ワールド・ピース・フェスティバル」という名前前で、ハチ公前でやったり、これまで3回開催しています。

一番最初は、いわゆる安保法制が衆議院を通った後、参議院を通る前の2015年8月というタイミングでした。学生団体のSEALDsとか、もちろん弁護士会

や学者の会とか、反対運動はいろいろ盛り上がってきていましたけど、音楽家にはそんなに動きがなかったから。それで、音楽家とか、音楽家に限らず文化人とか、そういう動きがないとおかしいのと違うかな、そういうコンサートとかやらないとあかんと違うかなと。

— 中田さんはミュージシャンとして活躍されていますが、イベントを自分でオーガナイズするということを考え始めたのはいつからですか。

初めて自分でイベントをやったのは1998年ぐらいかな。僕は、一応ミュージシャンなのでバンドでライブするじゃないですか。ライブとは、だいたい1時間あったら、1時間任されて楽しんでいただくような音楽を演奏をするということだと思わんですね。

それで、90年代後半は、クラブミュージックが盛り上がっていた時代でしたよね。クラブイベントというのはDJがいる。DJということは、要するにレコードをかけるんですね。

どこが違うかというところ、1時間のエンターテインメントか、それとも一晩のエンターテインメントかということかなと思ったわけです。お客さんは、1時間だけ見るというのもそれはそれでいいですけど、もっとお酒飲んだりとか、踊ったりとか、音楽とか全部ひっくるめて一晩のエンターテインメントを求める時代かなと。それをやっていかんことには生き延びられないというか、芽を出せない。音楽シーンにおいて頭角を現すことができないのではないかと勝手に作戦を立てた、それが「SHOUT!」というイベントだったんです。1997年にプロトタイプみたいなやつをやった、1998年から2002年までやったのかな。

—— 90年代という、まだそれほど「フェス」というのがなかった時代ですね。

そうですね。「FUJI ROCK」が始まったのは1997年だったかな。フェスというものが音楽業界の中の大きな部分を占めるような感じではなかったと思います。

—— オーサカ=モノレールは、今年で25周年ということですが、結成したときからファンク一筋なんですか。

そんな感じです。

—— ちなみにですが、ファンクミュージックというのはどういう音楽ですか。

ファンクミュージックというのは、基本的には60年代の後半に出てきたアメリカの黒人音楽の大きな潮流の一つなんです。

60年代後半という、いわゆるベトナム戦争などがあつた混沌の、激動の時代です。そういう時代の中で、ソウルミュージックがファンクミュージックに変わったんです。ソウルミュージックはラブソング、つまりポップミュージックなんです、ある種の。それが60年代後半に、あなたのことが好きよとか、離れられないわとか、そんなことばかり歌っている場合と違うやろ、という時代の空気になった。それで出てきたのがファンクミュージックということだと思んです。

今、2017年に聴いているような、アメリカとかから来た音楽のほとんどすべてにファンクの要素は入っているんですよ。

—— 音楽的には、どのような特徴があるのでしょうか。

ファンクの特徴は何かと言われると難しいんですけど、1拍目が強いというのが音楽的な定義です。

それまでの音楽は、1と3が強拍で、2と4が弱拍というふうに、特にクラシックの世界では教えられるんですが、2と4も強く演奏するというのがジャズ革命です。2と4が強くなることによって躍動的なリズムになったんですね。その革命が起こったのが20世紀の初めです。つまり、1, **2**, 3, **4**, 2, **2**, 3, **4** (太字が強拍。以下同じ) というのがジャズで、リズム&ブルースもロックンロールも全部ここから生まれてきたわけです。ロックンロールというのはジャズの子供、孫みたいなものなんだと思います。

それが、60年代後半にファンク革命というのが起こった。簡単に言うとみんな2拍目と4拍目を強く演奏しすぎているから、今度は1拍目を強く、2拍目と4拍

目を強くしているのはそのまま、1拍目をもっと強くしようよという革命が来たんです。今までは、1, **2**, 3, **4**, 2, **2**, 3, **4** だったんですけど、1, **2**, 3, **4**, 1, **2**, 3, **4** というのに変わったんです。

—— ファンク革命を起こした中心人物というのは？

ジェームス・ブラウンですね。

—— 中田さんがオーサカ=モノレールを結成された25年前に、日本ではファンクミュージックをやっている人っていたのでしょうか。

ファンクをやっている人はたくさんいたと思います。そうだな…。

—— 左とん平さんの『ヘイ・ユウ・ブルース』とか。

『ヘイ・ユウ・ブルース』、かっこいいですね。『ヘイ・ユウ・ブルース』は、村上“ポンタ”秀一さんや深町純さん、当時のジャズのスタジオミュージシャンの人たちがやっていたんですね。あれはフュージョンサウンドというやつです。ちなみに、メロディーはジェームス・ブラウンの曲からきています。

日本でファンクをやっている人は、久保田利伸さんとか、バブルガム・ブラザーズとかいっぱいいましたね。それから70年代には、上田正樹さんとか、ソー・パッド・レビューというバンドとか、大阪ブルース・ロック・ブームみたいなものがありました。あの人たちも60年代、70年代のアメリカの黒人音楽をやろうとしてはったと思います。

—— 中田さんはご出身は大阪なんですか。

僕は、生まれは大阪で育ったのは奈良県です。父も母も大阪です。

—— バンドを始めたきっかけというのは？

高校1年の終わりか高校2年生の頭ぐらいに、レイ・チャールズとかジェームス・ブラウンを聴いて、それでバンドをやりたいと思ったんですよ。むちゃくちゃかっこよくてね。

オーサカ=モノレールというバンドは、大学から始めました。大学のジャズ研みたいなものがあり、それで僕もマイルス・デイヴィスみたいにトランペットを吹こうと思って練習したんですけど、あんまりうまくならなかったから、途中から嫌になってきて、こんなのやっているよりジェームス・ブラウンの方が楽しそうだなと思ってそっちにしました。

——バンドを何名で始められたんですか。

最初はすごくたくさん、20人ぐらいいたんですけど、それは遊びみたいなもので、面白そうだからとみんないっぱい寄ってきて。初めて大学の外でライブをやったときに13人ぐらいに減りました。またしばらくして10人ぐらいにして、今は8人かな。だいぶ減りましたね（笑）。

——大所帯バンドを運営する楽しさとか苦労はありますか。

僕はこのバンドしかやったことないので、ほかのバンドがどういうふうに運営されているかよく分からないんですけど、人数はたくさんの方が楽しいですよ。

もう25年経つのと、あとは基本的には僕中心にやっているバンドなので、何年かに1度くらいは誰かが辞めていくこともありますし、またその席を埋めるために次の新しい人を探して入ってもらうこともあります。でも、みんなそれぞれの人生なので、「辞めやがってコノヤロー！」みたいなことはなくて、辞めるということになったら辞めるんやし、入ってきてくれる人がいたらウェルカムで入ってもらって、それは会社も一緒だと思いますけど。会社だってずっと長いこといたらそれはその楽しさもあるけど、でも辞めたり、新しく入ったりすると思うんですよ。

——ジェームス・ブラウンへの敬愛を公言されていますが、バンド編成的にも、スタイル的なものも、ジェームス・ブラウン的な面がありますね。リーダーのトップダウン式というか。

ある程度トップダウン式なんですけど、僕なりになるべくメンバーの特性みたいなものは生かそうとしているつもりなんです。あんまりしてないとよく言われるんですけど（笑）。

——2016年に公開された『ミスター・ダイナマイト：ファンクの帝王ジェームス・ブラウン』というジェームス・ブラウンのドキュメンタリー映画の字幕監修をされたのですね。

僕には、ジェームス・ブラウンの影響しかなくて、ジェームス・ブラウンの研究をずっとやっている、みたいな感じです。

音楽にはいろいろな面があると思うんですよ。音楽はどうやって作られていたか、時代背景がどうだったか。時代背景だけじゃなくて、このジェームス・ブラウンという人の個人的な事情、どういう家庭に生まれたかもあるし、それを全部総合的に考えないと、音符だけを追うとか、その人の経歴だけを追うとかしていても面白くないですからね。

——海外ツアーを毎年行われていますが、ヨーロッパが多いんですか。

はい、アメリカツアーを1回、カナダツアーを1回、あとはオーストラリアを3、4回ぐらい。あとはヨーロッパばっかりですね。15回ぐらい行っているのかな。

——ヨーロッパにはかなりファンがいらっしゃるんですか。

どうでしょう。僕らはニッチ産業みたいなもので、ファンクとか、1960年代の音楽を愛好している人というのはヨーロッパにもいるので、そうしたニッチ産業の中では、ある程度、名は知れてきたと思います。

いつも行くのはドイツ、フランス、スペイン、イギリスなどです。オランダとかベルギーとかイタリアとかスイスとかオーストリアとかアイルランドに行くこともあります。それでだいたい毎回8カ国ぐらいをツアーしています。

——お客さんの乗りは日本とは違いますか。

日本と違うと思いますね、やっぱり。でも、それはまた国によって違うわけですよ。フランスとスペインとドイツでも全然違いますからね。イギリスもね。

ただ、ヨーロッパに共通して言えることは、日本では、すでに有名だったり、知っている人じゃないとコンサートを見に行かないと思うんですよ。でも、向こうは夏祭りみたいなものがある、「何か知らんけど外国から音楽家が来たから見に行こか」みたいな、そういうオープンさがあると思いますね。

それから日本では、ライブハウスとかコンサートに行く人って、10代とか20代、もしくは30代ぐらいですよ。向こうはあまり決まった年齢というのがない気がします。

——客層が幅広いということですね。

そうですね。あとナイトクラブみたいなお酒を飲んでいるところにバンドを入れるというカルチャーがあるわけですよ。

日本人が飲みに行く場合は、居酒屋ですよ。座ってビールやお酒やウイスキーでも飲み、寿司や刺身を食べます。それが日本人スタイルなんですけど、ヨーロッパでは、座らず立ったままビールを飲んで、そこにバンドが入って演奏しているという、そういうスタイル。それがたぶんヨーロッパ流の楽しみ方です。

僕は、できる限り1960年代の当時にやっていたような音楽スタイルで演奏して、その人たちを迎えるというのを、信念というか、メインのテーマにしています。

——『ミスター・ダイナマイト』の他にも映画の字幕監修をされていますね。

映画の字幕監修をさせてもらったのは、他に『ソウル・パワー』と『最高の魂を持つ男』、あと『スウィート・スウィートバック』です。

——それはどういった映画ですか。

最初の2本がジェームス・ブラウン関連で、『スウィート・スウィートバック』は1971年の黒人映画です。それから、僕が監修じゃなくて自分で字幕を付けたやつがあと2個あって、全部いわゆる黒人映画です。黒人の音楽の映画か、もしくはアメリカの黒人が主人公の黒人カルチャーをベースにした映画ですね。

僕としては、1960年代と1970年代を中心にしたアメリカの黒人の音楽とか、当時の文化的なこととか政治的なこととか、そのテーマばかりを翻訳する字幕翻訳家になりたいなど老後の計画を立てているんです(笑)。

——中田さんのアメリカの黒人音楽や黒人映画、ひいては黒人文化への思いというのは、どこからきているのでしょうか。

アメリカというのはある程度、日本から遠い国ですよ。もちろん同盟国なのでカルチャーは色々入ってきますけど、地理的にも遠いし、英語だし、好きな音楽は時代も離れている。しかもアメリカの中でも黒人の話なので、そんなに情報があるわけでもないから、何でこれを好きになったのかなというのをよく考えるんです。

けど、これが好きな人は日本にもいっぱいいるわけですよ。特に音楽は。黒人音楽で言うと、1960年代はベトナム戦争もあって、当時の反権力的な空気が白人のポップカルチャーの中にもあった。だからアンチ・メイン・ストリームとして白人の若者が黒人の音楽も聴くようになった。

黒人というのは、よく言われる話ですけど、テレビに出てくる人は白人ばかりで、1960年代ぐらいまでは黒人であることはカッコいいことではなかった。でも、白人が黒人音楽を聴いたり、黒人音楽から影響を受けるようになって、黒人の方がカッコいいというような、黒人であることを誇らしく思うという意識改革が1968年ぐらいにあって、そういうのが日本人の僕からするとすごく羨ましい。

——ブラックプライド、ブラックビューティーと言われる

動きですね。

僕らは日本に住んでいても、ハリウッド映画などを見て、白人の方が「美人」であったり、「男前」であるという前提があるわけでしょう。

戦後ずっと続いてきたことなんですけど、足が長い方がいいとか、背が高い方がいいとか、やせている方がいいとか、鼻が高い方がいいとか、目はどっちかという青い方がいいとか、そういう白人の方が美しい、カッコいい、という価値観が僕らにはずっとあると思うんですが、それをいつか覆すことができたらいいなと思うんですよね。

黒人はそれをやった一つの良い例だと思うんです。長い間、白人の方が商品的価値があると思っていたけれども、1970年代以降、黒人であることが商品価値を持つというか、黒人であることも美しいという時代になった。

でも、アジア系の顔をしたハリウッドスターというのは、いまだにいないでしょう。ブルース・リーがそこまで行きかけたんですけど、死んじゃって。ジャッキー・チェンもアジア系の顔の主演を張れる人の1人ですけど、コメディ系なので、ラブロマンス映画もないし、いわゆるベッドシーンとかはないんですね。

——そうですね。確かに。

それはアジア系の人主演を張って、ベッドシーンをするような映画を撮っても客が入らないからハリウッドは作らないんですね。要するにアメリカでは、やっぱりアジア系の人がかっこいいというような映画は別に見たくない。アメリカは多様社会をウリにしている国のはずなのに、ハリウッドはそういうことは先導してくれない。

黒人文化を紹介するということの僕にとっての意味は、そういう彼らが通り抜けてきた課題とか、いろいろな面白いこととか悲しいこととかがあって、それで最後に意識が変わったという一つの素晴らしい良い例として、日本人がそこに学ぶことができたらいいということなんです。

プロフィール なかた・りょう

1992年に大阪で結成したソウル／ファンクグループのオーサカ＝モノレールのボーカル兼バンドリーダー。1980年代後半のレアグループの影響を強く受け、ジェームス・ブラウン・スタイルのグループを主宰し、日本に留まらず、ヨーロッパを中心とする海外でのライブも数多く行っている。アメリカの黒人文化がテーマとなった映画の字幕監修なども行う傍ら、ソウルミュージックの伝説的歌手らを日本へ招聘し、現代のリリスナーに紹介する活動にも力を入れている。